６　真木野の石造物

６－１　真木野の庚申塔群と日蓮宗地域の庚申塔

蕨 由美

はじめに

真木野には、字台の神明神社の左の道沿いには 11 基の庚申塔が並ぶ。

真木野は、「千葉胤貞譲状」に「真木野村」として記されている臼井庄神保郷の中山法華経寺領の村（注 1）で、千部講や大川施餓鬼など日蓮宗系の祭祀を旧神保領 13 地区と寺院が共同で行う（注 2）とともに、真木野地区としての庚申講も月 1 回行っている。

真木野の庚申塔群について、『八千代市の歴史 資料編』（注 3）の「石造文化財」と、『よなもと今昔』10 号（注 4）、同 11 号（注 5）を参考に、2023 年 1 月～4 月に、畠山隆・鈴木千代・松柴慎吾・藤村誠枝・菅原賢男・蕨由美会員で、特に銘文に注目して調査し、その詳細を調査カードに記録した。

本稿では、真木野の庚申塔調査結果とともに、八千代市内日蓮宗地域の庚申塔の集計分析結果、さらに千葉県内の日蓮宗系庚申塔の特徴についての考察を報告する。

１．真木野の庚申塔群

真木野の庚申塔は、寛延 3 年（1750）から昭和 54 年（1979）の建立で、その総数は 11 基である（表 1）。

うち 5 基には、建立者名が連記されている（表 2）。

最古の寛延 3 年塔（写真 1）は、笠付角柱型で青面金剛像を刻む。この青面金剛像の像容は、享保～宝暦期（1710～1760 年代）の五十年間に印西市域と八千代市域などの周辺の地域に 130 基以上集中して見られる画一的な特徴ある像容である（注 6）。

写真１　　No.１　寛延３年塔

他の 10 基は文字塔で、主尊銘「釈（釋）提桓因天王」が宝暦 14 年塔（写真 2）と寛政 2 年塔の 2 基、「大帝釈天王」が万延元年塔 1 基、他の 7 基は「庚申塔」などの銘であった。うち、文政 2 年（1819）銘塔（写真 3）は、篆書体の凝った書体である。

日蓮宗系庚申塔の主尊銘としては「南無妙法蓮華経」の題目や「帝釈天」がよく見られるが、「釈提桓因天王」の銘は極めて珍しい。真木野の妙徳寺住職の櫻井義久師のご教示によれば、「釈提桓因天王」という主尊名は、「しゃくだいかんにん」とお唱えし、護法の善神とさ

表１　真木野の庚申塔　一覧

No	造立年月日	西暦	像　容	形　状	銘　　文
1	寛延 3･11･吉	1750	青面金剛	笠付角柱型	真木野村(人名 19 名)
2	宝暦 14･孟春･吉祥	1764	なし	笠付角柱型	釈提桓因天王擁護　真木野村 庚申講中（人名 17 名）
3	寛政 12･11･吉祥	1800	三猿	駒型	釈提桓因天王塔　真木野村 (人名 10 名)
4	文化 4･正･吉	1807	三猿	駒型	庚申塔
5	文政 2･2･吉	1819	なし	駒型	庚申塔(篆書体)　講中十一人
6	文政 10･2･吉	1827	なし	駒型	庚申塔　講中十一人
7	天保 6･2･吉	1835	なし	駒型	庚申塔
8	万延元･12･吉	1860	なし	駒型	大帝釈天王　講中
9	明治 8･3･吉	1875	なし	山状角柱型	庚申供養塔　當村　講中
10	明治 24･11･3	1891	なし	山状角柱型	庚申塔　（人名 10 名）
11	昭和 54･11･吉	1979	なし	駒型	庚申塔　（人名 9 名）

表２　庚申塔の人名銘文

No. 1 寛延 3 年		No. 2 宝暦 14 年		No. 3 寛政 12 年	No. 10 明治 24 年	No. 11 昭和 54 年
新之亟	与　平	山﨑源次良	戸田清七郎	山﨑友右	戸田乙治郎	花沢和夫
友右ェ門	儀兵衛	同　友右衛門	戸田伊兵衛	満□	山﨑菊次郎	山崎　清
安三良	清次良	同　忠次良	勘兵衛	清兵	花沢幸助	戸田章一
孫三良	三次良	同　治兵衛	同　清四郎	友□	山﨑茂助	山崎　理
山三良	石　松	同　祐之亟	花沢傳兵衛	清□	仝　勇助	山崎弥太郎
傳三良		同　七之亟	花沢定四良	新□	仝　与助	戸田雅造
長五良		同　長次良	谷田村	勘兵	仝　平太郎	山崎賢二
傳次良		同　善次良	長八良	安右ェ	仝　幸太郎	山﨑一男
長　八			神窪村	善市	仝　源次郎	山﨑章夫
清三良			理兵衛	□右	戸田清次良	
忠次良			右同村			
久四良			藤七良			
七之亟						
予右ェ門						

れ、また帝釈天は「釈提桓因」とも記載されるとのことである。

時代区分では、江戸中期（1750～1800）3 基で、うち青面金剛像塔 1 基・「釈提桓因天王」銘 2 基である。江戸後期（1807～1860）5 基、うち「庚申」銘 4 基・「大帝釈天」銘 1 基、近代（1875～1891）は 2 基、現代（1979）1 基で、これら近現代の 3 基は「庚申」銘であった。

写真 2　No. 2　宝暦 14 年

写真 3　No. 5　文政 2 年

写真 4　No. 8　万延元年

写真 5　　真木野の庚申塚全景

２. 八千代市内の日蓮宗系庚申塔

中山法華経寺の旧神保領に属する市内北西部の平戸・佐山・島田・島田台・小池・真木野・神久保の旧村は、千部講など地域として歴史的に日蓮宗の宗教的結束を保ってきた地域で、その地域の石造物については『よなもと今昔』10 号（注 4）および 11 号（注 5）で報告されている。

八千代市域の庚申塔総数は、『市史』（注 3）によれば、昭和期まで 432 基である。

真木野などの日蓮宗地域の庚申塔数は、小池の平成期建立の 4 基を追加して 118 基で、真言宗などの他の地域と同様にムラの民間信仰としての庚申講が行われ、庚申塔の建造も盛んである。

時代別の数は、江戸前期（1682～1710）5 基、中期（1724～1800）22 基、後期（1807～1863）49 基、近代（1870～1934）33 基、現代（1946～2010）7 基、不明 2 基で、江戸時代前期から現代に至る（表 3）。

それらのうち 64 基は、日蓮宗の教義に基づき、題目の「南無妙法蓮華経」または「妙法」、「帝釈天王」、「釈提桓因天王」の銘をもつ日蓮宗系庚申塔である。

「南無妙法蓮華経」・「妙法」などの題目銘の 8 基は、天和～天保期（1682～1842）に見られ、前期 5 基のうち 4 基は題目銘であり、天和 2 年の 2 基の題目銘塔には三猿が付く。

表 3　所在地別の庚申塔数と日蓮宗系庚申塔数と年代

所在地	全数	＊数	年銘（西暦）
小池　字庚申裏	24	19	1692～2019
真木野　字台	11	3	1750～1979
佐山　字新久	13	4	1710～1892
佐山　熱田神社	12	2	1767～1934
平戸　字道地	17	14	1682～1916
島田　字通原	18	13	1682～1932
島田台　長唱寺	12	3	1737～1946
神久保　字井戸作	6	3	1790～1908
神久保　字上谷津	5	3	1790～1885
計	118	64	1682～2019

＊日蓮宗系庚申塔数

表 4　八千代市内の日蓮宗地域の庚申塔

内訳	日蓮宗系庚申塔の主尊銘				一般の庚申塔の主尊銘				
像容	題目	帝釈天	釈提桓因	小計	庚申	猿田彦	なし	小計	計
青面金剛像	4	2	0	6	2	0	2	4	10
三猿像	2	17	2	21	3	0	0	3	24
像なし	2	34	1	37	45	1	1	47	84
計	8	53	3	64	49	1	3	53	118

写真 6　小池　　題目が刻まれた青面金剛像塔

写真 7　小池　「大帝釈天王」銘の文字塔

「帝釈天王」銘塔 53 基は、宝永～平成期（1710～2019）に、「庚申」銘塔は享保～平成期（1724～1991）の江戸後期と近現代に集中する。

「釈提桓因天王」銘塔は、宝暦 14 年と寛政 12 年の真木野の 2 基と小池の天明 7 年（1787）の 1 基の計 3 基、県内では隣の船橋市の元禄から文政期の 4 基だけである。

総数 118 基のうち所在地別では、小池が 24 基と多く、最新は小池の平成 31 年(2019)の三猿付き「大帝釈天王」銘塔（写真 8 は、平成 22 年建立）である。

古いのは平戸と島田の天和 2 年（1682）銘の笠付角柱型（写真 9）で、ともに三面に一匹ずつ猿の浮彫りと「妙法蓮華経」の題目銘がある。この三猿付き庚申塔は八千代市最古の万治 3 年（1660）銘の吉橋高本八幡神社の類型である（注 7）。

青面金剛像塔は、元禄～明和期（1692～1765）の 10 基で、小池の元禄 5 年（1692）（写真 6 の右端）、島田の元禄 16 年（1703）、小池の宝暦 9 年（1759）と島田の同宝暦

9年の塔には「妙法蓮華経」などの題目が記されてある。

佐山の享保19年（1734）（写真10）と平戸の宝暦12年（1762）銘の青面金剛像塔2基には「帝釈天王」の主尊銘が、島田の宝暦9年塔には題目と「帝釈天王」が併記されていることから、当時、日蓮宗地域の庚申塔の主尊「帝釈天」像の姿は、青面金剛像と認識されていた（注8・9）と考えられる。

また真木野の寛延3年銘青面金剛像の像容は、同時期の佐山・小池・平戸の青面金剛像塔3基の像容と全く同じであり、これらは印旛沼周辺の印西・八千代市域などで共通する画一的な意匠である（注6）。

写真8　小池（ 平成22年）
三猿付「大帝釈天王」銘塔

写真9　島田　（天和２年）
最古の三猿付題目塔

写真10　佐山（享保19年）
青面金剛像「帝釈天王」銘塔

３. 千葉県の日蓮宗系庚申塔

千葉県内の日蓮宗信仰圏は、中山法華経寺の多数の末寺が占める江戸川東岸地域～船橋市東部～八千代市北西部の県北西部と、千葉市から旧「七里法華」を含む県東部地域の二つがあり、この地域は日蓮宗のみで他宗派の寺院がほとんどない地域となっている。

千葉県内の日蓮宗系庚申塔として、沖本博氏の2004年報告（注10）では、総数191基と計上されている。この数は、題目や帝釈天・釈提桓因などの日蓮宗の教義による主尊銘のある庚申塔に限定され、これらと同一の庚申塔群でも題目などの銘のない青面金剛像塔や「庚申」の文字塔などは除外してある。

以下、沖本氏の報告によれば、地域は中山法華経寺の神保領であった八千代市と船橋

市に集中し、県全体の 64%を占める。他は市川市・松戸市・鎌ヶ谷市・白井市などの近接地域であり、他の日蓮宗地域での庚申塔の建立は見られない。

初出は、市川市曽谷安国寺の明暦 2 年（1656）の「妙法」の銘のある釈迦如来像塔で、日蓮宗において釈迦如来への信仰は篤く、釈迦如来像を刻む庚申塔は延宝 5 年（1677）銘の松戸市本法寺の庚申塔まで 6 基あり、この時期の特徴となっている。

青面金剛像の初出は、小池の元禄 5 年（1692）の題目塔（写真 6 の右端）で、明和 2 年（1765）まで八千代市と船橋市域に 10 基ある。うち 3 基に帝釈天と帝釈天を意味する釈提桓因の銘があり、前述したとおり、帝釈天の像容を青面金剛像と同一視していたと推定される。

日蓮宗系庚申塔に青面金剛像が刻まれなくなった後、150 基もの塔が建てられているが、そのほとんどが「帝釈天」の文字塔となる。

帝釈天は、釈提桓因陀羅尼のことで、釈提桓因の釈と陀羅尼つまり天帝の帝を合わせて帝釈の名としたといわれる。インドの神で、仏法を守る神として日本に伝えられ、奈良時代の仏像に存在する。中世では、天に居住し衆生の善悪を監視・記録するという思想から、道教の天帝に比定された（注 9・11）。

日蓮宗においてこの仏を篤く礼拝してきたというが、その像を刻んだ石仏はほとんど見られず、千葉県では船橋市前貝塚町神明神社の元禄 3 年銘の 1 基だけである。

帝釈天の名が一般にひろく知られるようになったのは、安永 7 年（1778）の庚申の日に柴又の題経寺で「帝釈天」という像が刻まれた板本尊が発見され、その霊験が有名になってからといわれる（注 10・12）。

この板本尊の像（写真 11）は、一般的な帝釈天像とは異なる特殊な像であるが、その画像は「高祖御真筆の板本尊」として刷られ、広く普及した。一種の「はやり神」として人気があったが、この題経寺板本尊像を庚申塔に刻まれたものは意外と少なく、松戸市紙敷の広隆寺の嘉永 5 年（1852）の像塔が県内では唯一で、他はすべて文字塔である。

以上、千葉県内の日蓮宗系庚申塔の分布は、八千代市北西部と船橋市東部の地域の中山門流の地域に限られていて、県東部の顕本法華宗系の地域とまた同じ

写真 11　真木野の庚申講の掛軸
題経寺より 2004 年購入の板本尊

中山門流末寺の多い八日市場市や多古町には、庚申塔の存在が確認されていない。沖本氏は、「中山法華経寺の教圏においても庚申信仰を取り入れた地域とそうでない地域がある」と述べられて、「その事情は何によるものであろうか。」との疑問を提起している。

私にその問いを解く知識はないが、庚申講のほか、この地域の特性として、近世半ばから近世にかけて、子安講、月待講、馬頭観音講など性別年齢層別の講が盛んな地域であり、隣接する非日蓮宗地域とは、講の礼拝対象や石塔の主尊銘などは異なっていても、その構成や内容がほぼ同じであることがその謎を解く鍵となると思ってきた。

坂本要氏は、民俗行事が温存されている下総台地での村落内の宗教的講の様相を調べ、日蓮宗地区の講と他宗派の講を比較し、宗派の相違を超えて機能を同じくしている（注13）と述べている。

八千代市・船橋市の日蓮宗地域の村落も、講が盛んな特性をもつ下総地域の一部であり、講の社会的な機能は地域として共通する。千葉県北部の中山門流でも庚申信仰を取り入れた地域とそうでない地域の差は、まさに、日蓮宗地域を囲むこの旧印旛郡を中心とする地域全体が庚申講の盛んな地域であるという特性に由来するのではないかと思う。

市内旧村の民俗を調査していて、礼拝する本尊や宗教儀礼の唱えごとや経文が宗派で異なっても、民間信仰の根幹が共通する地域性を、感じさせられる日々である。

注・出典

1. 『八千代市の歴史　通史編 下』 八千代市　2008 年
2. 蕨由美「八千代市平戸の民俗行事『お釈迦講』と『大川施餓鬼』」 『史談八千代』 第 33 号 八千代市郷土歴史研究会　2008 年
3.「石造文化財」『八千代市の歴史 資料編 近代現代Ⅲ 石造文化財』 八千代市 2006 年
4. 木原律子・早瀬黄己「睦地区の石造文化財①」『よなもと今昔』 10 号　阿蘇郷土研究サークル 1992 年
5. 木原律子・早瀬黄己「睦地区の石造文化財②」『よなもと今昔』 11 号　阿蘇郷土研究サークル 1993 年
6. 石田年子「利根川中流域の石工某工房と生首持型庚申塔」 『日本の石仏』 No.171 日本石仏協会　2020 年
7.蕨由美「高本の万治３年銘庚申塔とそのスタイル「三猿三面彫塔」の広がり」 『史談八千代』 第 45 号 八千代市郷土歴史研究会 2020 年
8. 横田甲一「日蓮宗系の庚申塔」『房総の石仏』 第 2 号 1983 年 房総石造文化財研究会
9. 小花波平六「日蓮宗と庚申信仰」『庚申　民間信仰の研究』 庚申懇話会 1978 年
10. 沖本博「日蓮宗系庚申塔について―庚申ノート　その三―」 『房総の石仏』 第 14 号　房総石造文化財研究会　2004 年
11. 小花波平六「庚申信仰礼拝対象の変遷」 『庚申信仰』　雄山閣出版 2000 年
12. 綿谷翔太「柴又帝釈天の庚申信仰」『常民文化』第 38 号 成城大学大学院 2015 年
13. 坂本要 「題目講・念仏講および子安講－仏教民俗にみられる講の機能－」 『日蓮宗の諸問題』 雄山閣 1975 年